風吾の潜在能力

tommy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風吾の潜在能力

【Ｎコード】
Ｎ９０９９Ｚ

【作者名】
ｔｏｍｍｙ

【あらすじ】
１人道路の真ん中を歩き続ける主人公。十字路の交差点に差し掛かった時、とても人間とは思えない奇妙な女に遭遇してしまうのだが…。幽霊ものではなく、超能力ものです。（とにかく途中で投げ出したりせず、最後まで書き切るつもりです）

第1話　走れ！！（前書き）

登場人物

風吾　（フーゴ）　２１才

この物語の主人公。神奈川在住の大学3年生。決して馬鹿ではないが、頭も決して良いとは言えない微妙なＩＱの持ち主。そろそろ就活をはじめなきゃいけないことに絶望している。体格は中肉中背で、身長は１８０ｃｍあり、高校時代は陸上の選手だった。

第1話　走れ！！

昨日見た夢の事だ……いや…正確には夢ではなかったのかもしれない。

僕は道路の真ん中あたりで　1人ぽつんと突っ立っていた。夜の道路にはチラホラと車が走っていたが、僕の姿は見えていないようで、体スレスレのところを走り抜けてくる。

だが不思議と怖くはなかった　これが夢なんだということに頭の片隅で薄々気付いていたからだ。

僕は平然と道路の真ん中を歩いて行った…ただひたすらに歩き続けた。

ふと遠くの方に目をやると　何か白い物体がスーッと道路を横切って行くのが見えた。それは人のように見えたが　僕は気にすることなく歩き続ける。

しばらくすると　十字路の交差点に出た。交差点の真ん中に誰かがいる。目を凝らして見ると　それは白い服を着た女の人のようだった。

何かぶつぶつとしゃべっている…だが僕にはそれを聞き取ることができなかった。

次の瞬間！！その女はすごいスピードで僕目掛けて走ってきた。

その速さは尋常じゃない　車よりも速く　どんどん僕へと迫ってく

る。とにかくアレは人が出せるスピードじゃない　僕は必死になって逃げた　これが夢だということも忘れて…

僕は怖かった　泣きそうになった　あの女に捕まったら僕は終わりだ　そう思ったからだ。

ひたすらに走った　だがあんなに速い女に走って逃げ切れるはずがない、僕は思い切って走りながら後ろを振り返った。

すると　こともあろうに女は僕の随分後ろを走って追いかけてくる…どういう事だろう？…すぐにその理由は分かった。

僕はその女よりも速いスピードで走っている…時速８０キロぐらいだろうか？…なぜこんなに速く走れているのかは分からない。

とにかくこんだけ速く走れれば　あの女から逃げ切れる　そう思い顔を前に向けると　目の前に車がこっち向かって突っ込んでくる。

引かれるッ！！そう思った僕はとっさになって上へと跳び上がった。すると　足から地面が面白いほど離れていく

『うぇぇぇぇーッ！？』

僕は１０メートル近い高さまで跳んでいた。

あり得ないほどのジャンプ力だ…自分でも驚いた…なぜあんなに速く走れたり　こんなに高く跳ぶことができるのだろう？僕は人間じゃなくなってしまったのか！？

そんなことを考えているうちに　僕は何事もなかったかのように地面に着地した。

今はそんなこと考えてる場合じゃない　あの女から逃げ切ることが先決だ。

僕はすごい速さで走った　走り続けた。いつの間にか恐怖心などなくなっていた。何も怖いものなどない　僕に追いつける奴なんていやしない　僕は風だ！！

そう頭の中で呪文のように何度も呟いた。そのおかげで自分が追われている事など　ほとんど忘れていた、ただひたすらに走るのみ…それだけだ

第1話　走れ！！（後書き）

能力：足（人間離れしたスピードで走ったり　跳ねたりする事ができる）

第2話　1人目の犠牲者

気が付けば後ろに女の姿はなかった。どれほどの時間走っていたんだろう？…もうかなりの距離を走った気がする。

それなのにさっきとあまり景色が変わっていない、僕はまだ道路の上にいた。ここはどこなんだろう？僕は急に不安になった…

あの女を振り切れたのはいいが、ここがどこなのか見当もつかない。ここはどこですか？と誰かに聞きたいところだが、周りに人など1人もいないし、さっきまで走っていた車さえ全くいなくなっていた。

あたりは　しーんっと静まり返っている。その静けさが僕を余計に不安にさせた。

『あッ！！』と僕は声を上げた。

そうだ…これは夢なんだ　僕は思った。

夢じゃなければ　あんなに速く走れる女なんているわけがないし、僕がこんな人間離れしたスピードで走ったり　跳んだりできるはずがない。

それにあんだけ長く走り続けたのに　息ひとつ上がっていないじゃないか。そう　これは夢だからだ…そもそもあの女に追いかけられる前に　薄々そんなことを思っていたような気もする。

とにかくこれが夢なら　もう逃げる必要はない。目を覚ませば帰れるんだ。僕はその場に座り込んで目が覚めるのを待つことにした。

なかなか目が覚めない…どうしたら僕は目を覚ますのだろう？と
普通なら考えもしないような事を考えている。

しかし考えても答えなど出ない。今の僕にできることは　やはり待つことだけだ。そんなことを考えているうちに、遠くの方で何か白い物体がすごいスピードでこちらに向かって近づいて来ているのに気が付いた。

あの女だ…だがもう逃げる必要はないんだ…これは夢なんだから…
僕は立ち上がり　こちらに向かって走ってくる女に指を差して　大きな声で

『これは夢だって分かってんだぞッ！！バーカ！！バーカ！！』

と、夢と分かりながらも　少し怖かったのか、子供みたいなことを言ってしまった…

しかも　声もかなり震えていた気がする…カッコつかねぇ…僕は少し後悔した。

すると　女はニタニタと笑いながら　さらに僕へと近づき　僕の目の前でピタリと止まった。

正直怖かった…心臓の鼓動が早まるのが分かった。

僕は恐る恐るその女の顔を見た。１０代後半の若い女の子にも見えるし、３０過ぎのおばさんのようにも見えた…顔には大きな火傷のような傷がある。

その傷はまだできたばかりのようで、血が少し滲んでいた。そのせいもあり、顔を見ただけでは年齢を特定することはできなかった。

最初にこの女を見た時には　こんな傷はなかったような気がするが…よく見ると　首の裾の部分も少し焼け焦げている…何かあったのだろうか？そもそも誰なんだコイツ？

…と、一瞬思ったが、これは夢なんだから　どうでもいいと　すぐに考えを改めた。すると　女は小さな声でボソッと呟いた。

『夢じゃないから…』

えっ！？と思った瞬間　女は僕の首に掴みかかり　ぎりぎりと爪を立てて僕の首を絞めはじめた。

く…苦しい…夢のはずなのに僕は息をすることができなかった。どういう事だ！？この女の言うとおり　コレは夢じゃないのか！？

僕は女の腕を引き剥がそうと　手を伸ばした瞬間…女はパッと僕の首から手を離し、そのままうつ伏せの状態で地面に倒れた。

何が起こったのかよく分からなかった…だが僕はその女を見て唖然とした…

背中全体に大きな火傷の傷があった…背中の部分の服と皮膚は酷く焼け焦げ　血もかなり滲み出ている、　全体的に赤黒く　かなり痛々しい。それに肉が焦げているような臭いもした。

僕はしゃがみ込み　女に呼び掛けてみたが…なんの反応もない…死んでいるみたいだ…

一瞬　僕が殺したのかと不安になったが、そんなはずはない…僕はただ逃げていただけだ。死因はやはり　この背中の傷だろう…

誰かにやられた…？僕の頭の中に色々な考えが浮かんだ…

たとえば　僕が追われているのを誰かが見ていて、その誰かが　この女を止めようとして…結果的に殺してしまったとか…

う～ん…それはないか……なら

この女は　実は誰から逃げていて…自分が追いかけられていると勘違いした僕が　逃げている間に　その誰かに追い付かれて　殺されかけたが　なんとか逃げて来て、結局　ここで力尽きてしまったとか…

後者だとしたら　この女は僕に助けを求めて　僕に近づいてきた可能性もある…いや…でもこの女は僕の首を絞めたじゃないか…ということは　やはり前者なのだろうか？

でも死んだ女の背中を見た限り、人がやったものとは僕は思えなかった…背中は酷く焼け焦げている…犯人は火炎放射器でも持っているんだろうか？

……いや普通持ってないだろ。ということは事故か？事故っていってもどんな事故だ！？たとえが思い浮かばない…思い付いたとして　相当こじつけな考えになってしまいそうだ…

『あんた何やってんの？』

そんな事を考えていると…後ろから若い男の声が聞こえた。

振り返ってみると　そこには上半身裸の　いかにも怪しげな風貌の男がこちらを見ていた。

第3話　出会うはずのない二人（前書き）

登場人物

走ってきた女　　？才

フーゴ目掛けて走ってきた女。見た目は割りと普通の女の人。あまりにも速いスピードで走ってきた為に、フーゴは彼女に恐怖感を抱いた。突然倒れて死んでしまったが…死因は詳しくは分かっていない。背中には火傷のような大きな傷があった。

第3話　出会うはずのない二人

何なんだこの男…何で上半身裸なんだよ!?…今12月だぞ…寒くないのか?

『何かあったんスか?』

男が訪ねてきた。

『えっ?…えと…』

ま…まずいな…僕は今この男を怪しい奴だと思ったが、この男からしたら　死体のそばでしゃがみ込んでいる僕の方が断然怪しいかもしれない。

『その人死んでんの?』

男は率直に訪ねてくる。

うろたえるな…別に僕はやましい事など何もしていない、正直に話せばいいだけじゃないか。

『そ　そうだ…死んでるんだ…』

僕は答えた。

『あんたが殺したの?』

男はストレートに訪ねてくる。

『違うッ！！僕じゃないッ！！』

僕は自分でも驚くぐらい大きな声を上げてしまった。何を必死になってるんだ僕は…余計怪しいじゃないか。

『ふははッ！！必死すぎッ！！余計怪しいぜ』

男は笑った。

うぅ…どう説明すれば分かってもらえるだろう…僕は人に物事を説明するのは　苦手な方だ…今までに起こった出来事を　そのまま話せば分かってもらえるだろうか…？

僕がどこから説明しようかと考えていると　男が先に口を開いた。

『別にそんな不安そうな顔しなくていいぜ。あんたが殺したんじゃないんだろ？…俺には分かる』

『！？……信じてくれるのか？』

『ああ…てか実は遠くから見てた（笑）』

『……見てたのかよ…』

『女があんたの首を絞めたと思ったら　突然その女が倒れたみたいだったな…』

どうやらこの男は　僕が道路に1人座り込んでから、　そこに女がやって来て…僕が首を絞められて…女が地面に倒れるまでの光景を一通り見ていたらしい…

だがそこを見ただけで　僕が殺したんじゃないと言い切るのは詰めが甘いような気がする…この女を見る限り死因は背中の傷だ…僕が前もって女を瀕死状態までもちこみ、ここまで逃げてきただけという可能性だってある。

この男は人を疑うことを知らないのか？つか何で上半身裸なんだよ？おかしいだろ…色々と疑問があったが反論はしなかった。僕が殺したんじゃないという事は　僕自身が一番分かっている。この男の言っていることは正しい。

『とりあえずアレだな……警察呼んだ方が良くね？』

男は言った。たしかにその通りだ…全く気が付かなかった。色々と日常とは　かけ離れた事が起こりすぎて、常識的なことが頭に浮かんでこなかった。

さっきまでは、ここで起こっている事は　全て夢だと思っていたが…あの女に首を絞められた時の痛みは本物だった。あまりにも非現実的な事が起こりすぎて　僕はコレが夢だと思い込み　現実から逃げていたのかもしれない。

『そうだな…とりあえず警察を呼ぼう』

僕は自分のズボンのポケットから携帯電話を取り出そうとしたが…ない…どこかに落としてしまったのだろうか？仕方なく僕は男に連絡を頼むことにした。

『悪い　どこかに携帯落としたみたいだ…君の携帯で警察に連絡してくれないか？』

『えっ？マジでッ！？俺が電話すんのかよッ！？　警察に電話なんかしたことねぇし！！スゲーこえーよ！！緊張すんなッ！！』

『……なら携帯を貸してくれ、僕が電話する』

『頼むわ！！』

すると男はズボンの後ろポケットから携帯を取り出し、僕に手渡した。

僕はすぐに電話しようと携帯をいじったが、画面は真っ暗のままだった。

『あれ？これ電源入ってないのか？』

『ん？ちょっと貸してみ』

僕は男に携帯を渡した。

『あれ～？電池切れてんのかな？分からん！！』

男はなぜか偉そうだった。

『仕方ない　とりあえずこの女の人を道路の脇まで運ぼう。このままじゃ車に跳ねられてしまうかもしれないし…』

『おお～　確かにそうだな』

僕ら二人は　死体を道路の脇まで運ぶことにした。そしてジャンケ

ンで　僕が死体の頭の方を持ち、あの男が死体の足の方を持つことに決まった。

僕らは　うつ伏せに倒れている　女の死体の目の前まで近づいた。相変わらず　肉が焼け焦げるような嫌な臭いがしたが…まだ腐敗が進んでいないだけマシだ…と僕は自分に言い聞かせた。

あの男は目を背けて　死体をあまり見ないようにしている。やっぱり怖いのだろうか？…どことなく体も震えている気がする……いやそれは寒いからか？…上半身裸だしな…無理もない。

そういえば　僕はまだこの男に名前を聞いていない事に気が付いた。名前ぐらい聞いておこうか…

『そういえばまだ名前聞いてなかったな　お互い自己紹介でもするか』

『えぇッ！？ここで！？』

男はかなり引いている…

『分かった…自己紹介は死体を運び終わってからにしよう』

『うん…そうしてくれ…』

僕らは　うつ伏せに倒れている死体を見た…一瞬　死体をあお向けにしようかと思ったが、僕はその女の顔を見るのが怖く　うつ伏せのまま運ぶことにした。

僕と男は恐る恐る死体の体に触れた…まだ温かい…生きているみた

いだ…いや本当に生きているのか？

僕はこの女が急に動き出すんじゃないかと　ヒヤヒヤした…　マジで怖い…心臓の鼓動も早まる…怖い怖い怖い怖い怖い…自分で運ぼうと言っておきながら　情けない…だって怖いんだもん…仕方がない…できることなら　また走って逃げ出したい…そんな余計なことを思っていた。

だけど…やるしかない！！僕は覚悟を決めた。

『よし！！じゃあ死体を持ち上げたら　はや歩きで道路の脇まで行くぞ！！』

と僕は言った。

急に僕が大きな声を出した為　男は一瞬　ビクッとしたが

『えぇッ！？わ　わかった！！』

と　返事をしてくれた。

僕らは死体を持ち上げた。死体は思ったより　ずっしりと重く感じた。

『よし行くぞッ！！』

『おう！！』

僕は　はや歩きで道路の脇に向かった。だがあの男は僕のスピードについてきてくれず　チンタラと運んでいる。

『早くしろ！！遅いぞ！！』

『そっちが速いんだってッ！！』

仕方なく僕は男のペースに合わせて死体を運んだ…なんとか無事に運ぶことができた。僕たちは死体とは少し離れたところに座り、一息ついた。

『ふぅ～…』『ふぃ～』

僕と男は同時に安堵の息をもらした。

『…そうだッ！！自己紹介だ自己紹介』

僕は思い出したかのように言った。

『そういえばそんなこと言ってたな…』

男は少し疲れているようだが、名前くらいは教えてくれるだろう。相手の名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが礼儀と聞いたことがある。僕は自分から先に名乗ることにした。

『じゃあまずは僕からだな…僕の名前は風吾』

『フーゴ？…変わった名前だな…面白い（笑）』

男は少し笑った…結構カッコいい名前だと思うんだけどな…僕はそのまま自己紹介を続けた。

『神奈川　在住の普通の大学生だ…う～ん後は特に言うことないな…』

『神奈川に住んでんの！？』

『えっ？まぁそうだけど…』

男はどうでもいいところに食い付いてきた。

『次は君の番だ』

僕は男に自己紹介をするよう促した。

『俺か？…俺の名前は…翼…かな』

『ツバサか…いい名前だな…なんかそれっぽい』

何がそれっぽいのか自分で言っておいて　よく分からなかったが、ツバサはそのまま自己紹介を続けた。

『え～と…まぁ静岡に住んでる…高校生…だな』

『高校生かよ…てことは僕より年下か……んッ？てか静岡に住んでんのか？』

『ああ…うん』

『てことは　ここって静岡なのか？』

『知らないよ…そういえば俺ってば気付いたらこの道路の上にいた

んだよねぇ』

『僕と同じだ…僕も自分が何でここにいるのかも　分かっていない…』

そうだ…何で僕はこんなところにいるんだ？…つか　ここはどこだ？

僕は神奈川に住んでいて　ツバサ　は静岡に住んでいると言っている…普通に生活をしていれば　出会うはずのない二人が出会っている…

一体どういう事だ？誰かがここに僕らを連れてきたのか？…だとしたらなぜ？…いやマジで分からん…どゆことッ！？

考えても答えたなど全く出る気がしなかった。もう考えても仕方ない　行動あるのみだ…

『あっ！！』

と僕は言った。ツバサ　はなんだコイツという顔で僕を見た。僕は1つツバサ　に聞きたいことがあるのを思い出した。

『ツバサ　ちょっといいか？』

僕は言った。

『なんだよ…』

ツバサ　はちょっとイライラしているようだったが…僕は構わずツバサ　に質問した。

『お前なんで上半身裸なんだ？』

どうでも良さげな質問にツバサ　少し呆気にとられていた。

『ああ…なるほど…これか…』

ツバサ　は少しの間　黙っていたが、いを決したように立ち上がった…

『その理由はコレだ…』

というと　ツバサ　はこちらに背を向けた…その背中を見た瞬間

僕はゾッとした！！

ツバサ　の背中には肉なのか内臓なのか　よく分からい奇妙な物体がへばりついていた…しかもかなり大きい…

僕はあの女の死体を思い出した…あの死体には　背中に大きな火傷のような傷があった…おそらくあの女はそれが原因で死んだ…

その傷と何か関係があるんじゃないかと…僕は不安になった。

第４話　人質（前書き）

登場人物

翼　（ツバサ）　１９才

上半身裸の高校生。高校２年の時、ほとんど学校に行かず、ろくに勉強もしなかった為、一年留年してしまった…今は高校３年生。背中には何故か肉なのか内臓なのかよく分からない歪な塊がついている…。あまり常識のない性格だが、正義感は誰よりも強い。

第４話　人質

『お前大丈夫かよ…』

僕は心配になった。このままでは　ツバサ　もあの女と同じように死んでしまうんじゃないかと思ったからだ。

『まぁ大丈夫…別に痛くないし…』

ツバサ　は言った。

『大丈夫って言っても…全然大丈夫そうに見えないぞ…病院行った方が良くねーか？』

僕はツバサ　に病院に行くよう言った。

『うん…そうだな…』

ツバサは　さっきより元気がないように見えた。

『…でも病院ってどこにあんの？』

ツバサが僕に聞いた。僕はツバサに病院に行くよう言ったが、ここがどこなのかも分からないのだから　病院に行こうにも行けるはずがない。

『う～ん…困ったな…』

こういう時は　もういっそのこと救急車を呼びたいところだが、携

帯は使い物にならなかったし　周りに公衆電話もなければ　ひとっこ1人いない。

『とりあえず　そうだな…人を探そう。誰かしら人を見つければ
その人に救急車を呼んでもらえばいいし、ここがどこなのかも分かるだろ』

とにかく人を見つければ　警察も救急車も呼ぶことができる。今のこの奇妙な状況を打破するには　それしかないと僕は思った。

『その前にツバサ…お前寒くないのか？そんな格好で長いことといたら凍え死ぬぞ…』

『ん？俺は平気…この背中についてるヤツ、結構熱を持ってて熱いんだ…そのおかげで裸でも寒くないよ』

『なんだよそれ…暖房効果もあるのか…便利だな』

と　僕は冗談で返したが、心の中では心配で仕方がなかった…あの女は背中に火傷のような傷があって死んでいた。ツバサの背中についているヤツは熱を持っていて熱いらしい…

熱＝火傷。僕にはあの女の背中の傷と、ツバサの背中のヤツが、何か関係があるような気がしてならなかった。

『人を探すと言っても、まずどこに向かって探しに行くかだな』

ツバサは言った。

『僕は向こうの方から道路沿いに走ってここまできたんだけど…こ

こに来る途中　数台走ってる車を見かけただけで…あの女以外　人の姿は見かけなかったな。それにここに来る途中　建物なども特になかった…道路の両側には大量の木や草がしげっているだけだ』

ちょっとセリフ長いな　と思いながらも僕はツバサに説明した。

『ふ～ん　なるほど…まぁあんたが来た道を戻ってもしょうがねぇし、このまま先に進もうぜ』

まぁツバサの言う通りだ。僕も今来た道を戻る気はしないし、このまま道路沿いに進んで行けば　やがてどこか人のいる場所にたどり着けるはずだ。

とにかく後戻りするより　先に進みたいという気持ちの方が強かった。それが正直な意見だ。

僕らは歩いて先に進むことにした。

またすごいスピードで道路を走ってやろうとも思ったが、ツバサの背中のヤツがなんなのか分からないし　とにかくあまり刺激になるような行動はとらない方がいいだろうと僕は思った。

それにツバサが僕みたいに人間離れしたスピードで走ったり　跳んだりできるのかどうかも分からない。

もしできなかったとしたら　ツバサは僕を見てどう思うだろう？…やっぱり怖いと思うだろ…僕があの女をはじめて見た時と同じように…

今は普通の人間のふりをしておこう…いや…僕は今でも自分を普通

の人間だと思っている。

あれはもしかしたら奇跡が起きただけかもしれないし…

人間　極限状態に追い詰められた時、信じられない力を発揮するっていうしな…そうだ…そういうことにしておこう…今走ったら　普通の速度で走れるだろう…きっとそうだ

…。

てか　なんで僕はこんなにも普通の人間でありたいと必死なんだ…まるで妖怪にでもなったみたいだな…そんなに深刻に考える必要はないんだ…僕は自分に言い聞かせた。

『おい　あんた顔色が悪いぞマジで…大丈夫か?…つかスゲー真顔すぎ…なんか怖いって（笑）』

ツバサが僕を見て笑った。

この男は相変わらず率直だ…まぁ素直なだけなのかもしれない…悪い奴じゃないということは分かる…もしかしたら　この場を　なごませようと言ってくれただけなのかもしれない。

今思うと　僕が考え事をしていたせいで、長い間　沈黙が続いていた…そのせいで　ツバサに気を使わせてしまったようだ。

なんだか申し訳ない気持ちになった…

僕は歩きながら　ツバサに質問をすることにした。ツバサには色々と聞きたいこともあるしな。

『てかツバサ…その背中のヤツはいつからあるんだ？』

『え？コレ？…いつからだろう？…多分この道路の上にいた時からすでにあったんだと思う…』

『その背中のヤツができた原因は分かるか？』

『いや分かんねぇよ…分かってたら　あんたに話してっから！！』

『まぁ…そうだな…』

『てかさぁ…もういっその事この背中のヤツ剥がしてくんねぇ？』

『…いや無理だろ！？それ無理やり剥がしたらお前死ぬんじゃねぇのか！？』

『きっと大丈夫…今なら大丈夫な気がする！！』

ツバサは自信満々に答える。

いや馬鹿だ…絶対馬鹿だ…それに今なら大丈夫な気がするってどういう事だよ…大丈夫な時と大丈夫じゃない時の差はなんなんだ？気持ちの問題か？

僕はツバサの背中のヤツをまじまじと見た。それはどう見ても　ツバサの背中にガッチリとくっついている…というより背中の皮膚から直接生えているように見えた。

こんなもん剥がしたら出血多量で死ぬだろ…

『ん？』

僕は気が付いた。

ツバサの背中のヤツは　カドが少し角張っていた。それは骨のように見える…中に骨が通っているようだが…まさか肋骨が直接背中に突き出てしまっているのではないだろうか？…僕は怖くなった。

…これはツバサには黙っておこう…言ったところで　ツバサを余計不安にさせてしまうだけだ。

『ん？って何だよ！？なんかあんのかよッ！？』

ツバサは不安そうな顔で僕を見た。

『いや…まぁやっぱり引き剥がすのはやめた方がいいだろ…病院でちゃんと見てもらった方がいい』

『分かってるって、冗談で言ってみただけだ』

この状況でそんな冗談を言われても正直　笑えない…つか冗談で言ってるのか　本気で言ってるのかさえ　僕にはよく分からなかった。

そんな　なんの進展もなさげな会話を繰り返しながら、僕らは道路の上をひたすら歩いて行った。

しばらくすると　道路の先にトンネルが見えた。

トンネルを見ると　中は真っ暗だったが、入り口付近に一瞬　女の

人のような影がチラッと見えた。

『お！誰かいる！？』

ツバサはトンネルに向かって駆け出した。走っているツバサを見る限り、やはり僕みたいに　とてつもないスピードで走ることはできないようだ。

僕はツバサの後を追おうと　走ろうとしたが、ここですごいスピードで走ってしまってはは　ツバサが驚くだろうと思い…歩いてトンネルへと向かった。

ツバサは　そのままトンネルの中に入って行った。すぐにツバサとその女の話し声が　こっちに聞こえてくるんじゃないかと期待したが…妙に静かだ…

おかしいなと思いながらも…僕はトンネルの目の前までたどり着いた。中は異様なほど真っ暗だ…それに静かすぎる…ツバサはどうしたんだ？…

『ツバサ？』

僕はトンネルの中へ呼びかけてみたが…反応はない。まさか…何かあったのか…

不安と恐怖が僕の中に込み上げてきたが…僕は恐る恐るトンネルの中に足を踏み入れた。

中は真っ暗で何も見えない…

『動かないで…』

女の人の声が聞こえた。

僕は声が聞こえたを方を見た…だが真っ暗で何も見えない。

『あんた誰だ？』

僕は女に尋ねた。

『あなたこの状況が分からないのッ！？』

女は少し声を荒げた。

この状況と言われても、真っ暗で何も見えない…

だが　だんだんと目が慣れてきて、僕は今の状況を理解することができた。

僕の目の前にはツバサがいる、その後ろには　ツバサの後頭部に銃を突き付けた女が立っていた…

『沙織さん…これからどうするの？』

そのさらに後ろから　女の子の震えた声が聞こえた。もう一人いるのか…この人達の目的は何なんだ？…考えても僕には分かりそうにない。分かったのは　この銃を持った女は　サオリという名前だということだけだ。

『とりあえず雅也さんが来るのを待つわ…それからどうするか考え

ましょう』

と　サオリは言った。マサヤさん？…もう一人仲間がいるのか……

僕達はこれから何をされるのだろう？…

もしかしたら殺されるかもしれない…いや殺すんだったらもうすでに殺されているか…とにかくただではすまない気がする…このままじゃヤバいな…

どうにかして　あのサオリという女から銃を奪うことはできないだろうか？…

僕は考えた。

僕の足の速さなら…もしかしたら　なんとか銃を奪うことができるかもしれない…

第5話　影武者

サオリから銃を奪うには　やはり一瞬の隙を付くしかないだろう…隙を付くと言っても　銃はツバサの後頭部にずっと押し付けられている。

ツバサの後頭部から銃を離した時がチャンスなのだが…その時は訪れるだろうか…？

トンネルは真っ暗なので、サオリの顔は全く見えず　シルエットだけが見えている感じなのだが…かなりを僕を警戒しているのが分かる。

サオリはピクリとも動かず、ただ僕の方をじーっと見ている…多分気持ちの面で余裕がないのだろ…警戒している人間に隙など生まれるのか？…僕はどんどん不安になってきた。

相手の顔が見えれば、多少その人の心理も読み取れるのだが…

それにしても　ツバサが妙に大人しい…アイツならこんな状況の中でもギャーギャー騒ぎそうな気もするが…かなりビビっているのか？…

それとも　今　僕の目の前にいるのは実はツバサではないんじゃないだろうか？…サオリ同様　ツバサの顔も暗くて見えていない…

コイツが本物のツバサだという確証はない。

僕の頭の中に嫌な考えが色々と浮かんだ…

もし僕の目の前にいるのがツバサではないとしたら…コイツは一体誰だ？…受注八区　サオリ達の仲間という可能性が高い。

…なら何の為に本物のツバサではなく…わざわざ影武者を用意する必要があるのか…？

僕が思い付く理由は…ツバサをどこかに連れ去った場合…あるいは早まってツバサを殺してしまった場合…

ツバサを人質に捕ったと見せかける事で、僕を簡単に捕まえることができる。

だとしたら　サオリ達は　なぜ僕を殺さずに捕まえる必要があるのか？

理由は全く分からない…

てか僕を捕まえるにしても、僕に銃を突き付ければ簡単に捕まえることができる…わざわざ影武者を用意する必要がないな…

う～ん…だんだん　この推理に自信がなくなってきた…

やっぱり僕の目の前にいるのは　本物のツバサなのだろう…背丈的にも同じぐらいに思える。

そういやアイツ…女の死体を運ぶ時も　まともに死体を見ようとしなかったし…結構ビビりなのかもしれないな…

僕の目の前にいるのがツバサなら　下手な行動はとれない…もし僕が妙な動きを見せれば、ツバサの頭がえらい事になるだろう…まず助からない…

早くしないと　さっきサオリが言っていた　マサヤとかいう男が来てしまう…

人数が増えれば　サオリ達から逃げるのは余計　困難になる…やるなら今なのだが…

…そもそも　サオリにあの銃のヒキガネを引く勇気はあるのか…？もちろんサオリにも　あの銃を打ったらどうなるかぐらい想像はつくはずだ。

人が一人死ぬんだ…簡単にやれる事じゃない。

死ぬのが赤の他人だからといっても…普通に良心のある人間なら打つことはできない…と思う。少なくとも僕はできない。

だが　今のサオリは多分冷静じゃない…僕が妙な動きをすれば、パニックになって　思わずヒキガネを引いてしまう可能性だってある。

…やっぱり僕にはそんな危険な賭けはできない…自分の命だけならまだしも、これはツバサの命もかかっているんだ…そんな一か八かの賭けはやめておこう。

僕は落ち着いてサオリの手元を見た…銃の持ち方が少し変な気がする…よく見ると　ますます変だ…アレは本物の銃か？

僕は気が付いた。

さっきの影武者の考えはあながち間違っていないんじゃないのか！？
僕は最初、目の前にいる人は実はツバサではなく、ツバサの影武者ではないかと疑った。だが銃を持っているなら　わざわざツバサの影武者を用意する必要はない。

でも　もしあのサオリが持っている銃こそが　影武者だとしたら…つまり銃を持っていると見せ掛けて、何か別の物を　ツバサの後頭部に突き付けているだけなのでは？

それなら　こんな真っ暗なトンネルの中で、僕が来るのをわざわざ待ち受けていた理由が分かる…トンネルの外の　外灯に照らされてしまったら、手に持っているのが銃でないとすぐにバレてしまうからだ。

おそらくツバサは　いきなり後ろから後頭部に　固いものを突き付けられ『動くな』などと言われた為に、それを銃だと思い込んでいるんだろう…

だとすれば　もう恐れる必要はない…ツバサと一緒に堂々と逃げればいいのだが…これは僕の推測に過ぎない…もしかしたら本当に本物の銃なのかもしれない。

僕は直接サオリに聞いてみた。

『その銃は本物ですか？なんか持ち方が変ですよ…』

『…！？ッ……』

一瞬　サオリは銃を持っている方の手をチラッと確認し、僕の視界から銃が見えないよう　ツバサの頭と銃が重なるように銃を構え直した。

返事は返ってこなかったが、明らかに動揺しているのが分かる。

やはりアレは本物の銃ではない…多分…

『えっ？コレ本物の銃じゃねぇの？』

ツバサが言った。

やっぱり僕の目の前にいるのはツバサだった。

すると　さっきまでビビって固まっていたはずのツバサは、突然キョロキョロとしはじめた。

『動かないで！！本当に打つわよッ！！』

サオリが怒鳴った。

声が少し震えている…

『だってそれ本物の銃じゃないんだろ？』

と言ったと同時にツバサはその場で素早く振り返った。

サオリは銃を構えたまま後ずさる。

『なんだよ…携帯電話じゃん』

どうやらサオリの持っていたものは、やはり本物の銃ではなく、携帯電話を銃に見立てて持っていただけだったようだ。

サオリは膝をガクガクと震わさながら、携帯電話を地面に落とした。

『サオリさん…もうやめよ…』

サオリの後ろにいる女の子が言った。

『やめるって言ったってどうするのよッ!?』

サオリが大きな声で叫んだ。

すると　女の子は

『大丈夫…後１００メートルもない』

と意味不明なことを言った。

サオリは　かなり焦っていたようだが、その言葉を聞いて少し安心したようだ。

後１００メートルもないってどういう意味だろ?…この人達の目的は何なんだ?

そんな事を考えていると、ツバサがサオリの落とした携帯電話を拾い上げ

『ちょっとこの携帯貸してくれ』

とサオリに言った。サオリは返事をしなかったが、ツバサは構わず携帯を開いた。

その携帯の画面の光で　ツバサの顔が照らされた。電源がついているのを確認すると、ツバサは僕に携帯を手渡した。

警察と救急車を呼ぶのは　僕の役目ということか…僕は　その携帯電話で１１０と番号を入力した。

警察に連絡するのはいいが…ここがどこなのかも分からないのに…警察にはなんて説明すればいいのだろう？…と考えながら、僕はとりあえず電話を掛けた。

が…電話が掛からない。携帯からは　なんの音もしない…あれ？と思い僕は携帯の画面を見た。

一瞬　ここはトンネルの中だから、圏外なのかと思ったが、電波はＭＡＸの状態になっている…どういう事だ？…そもそも携帯からなんの音もしないのは　おかしい。

『何だコレ？壊れてんのか！？』

僕は　サオリ達にも聞こえるよう、わざと大きめの声で言った。

『フフ…』

サオリの笑い声が聞こえた。

僕は何かおかしな事を言ったのだろうか…？

『電話掛かんねぇの？』

ツバサが僕に聞いた。

『ああ…別に圏外ってわけじゃないみたいなんだが…何でだろう？』

『ちょっと貸してみ』

僕はツバサに携帯を渡した。

ツバサは携帯の画面をじっと見た。

『う～ん…分からん！！』

ツバサはよく分からないポーズをとりながら言った。

ここに来るちょっと前も、同じような会話をしたような気がする…デジャヴとか言うヤツか？…お笑いでいうとテンドンとか言うヤツ？…てかそれはどうでもいいや…

『後５０メートル…』

不意にまた　あの女の子が、意味不明な事を言った。

あの子は何なんだ？…さっきは１００メートルと言っていたが…今は５０メートルらしい…さっきより距離が短くなってるけど…あの子の口癖か？…いや口癖だったら結構ヤバいな…多分何か意味があるのだろう…

『あなた達…もうすぐ死ぬかもしれないから…最後に教えてあげる…』

サオリが言った。

『…死ぬかもしれない？僕らが？』

と聞いてみたが、サオリは僕の質問には答えてくれなかった。

『電話なんて掛かるわけないんだよ……コレは夢なんだからさ』

サオリは寂しそうに言った。

『はぁ！？……意味分かんねぇ…』

ツバサは少しあきれている。

だが　僕にはそれが出任せで言っているものとは思えなかった…少し前まで　僕もそんな事を思っていたからだ。

『夢って…僕の？…』

僕はサオリに聞いた。

『違う……誰かの』

と　サオリは答えてくれた。

『誰かって誰だよッ！？』

僕は大声を上げた。

『…知らない』

サオリはボソッと言った。

『ちょっと待てよ…コレが夢なわけねぇじゃん！！馬鹿じゃねーのッ！！』

ツバサが大きな声で言った。

『後３０メートル…』

また　あの女の子が言った。

『コレが夢だとしたら…どうしたら僕は目を覚ます？』

僕は馬鹿らしい事を大真面目に聞いた。

『さぁ…？ここで死んだら目ェ覚ますかもしれないけど…もしかしたら本当に死んじゃうかもしれないね』

サオリは僕を馬鹿にしたように言った。

『教えてくれ…あなた達は本当に存在している人間なのか？全部僕の妄想なんて落ちはないよな？』

僕は言った。

『実際に俺はここにいるって！！』

ツバサが答えた。

『多分　私とあなた達は同じ立場だと思うよ』

サオリも答えてくれた。

『じゃあ…みんなで同じ夢を見てるってこと？』

僕は聞いた。

『多分…ね』

サオリは言った。

『……』

小さくコツコツコツ　とトンネルの奥から誰かが歩いて来る音が響いて聞こえてきた。

だが僕にはそんな事はどうでもよかった…今はこの状況を知ることが僕にとって一番大切だったからだ。

『後１０メートル…』

また女の子が言った。

だが僕の耳にはほとんど入ってこなかった。

僕は考えた…もしサオリの言うとおり　コレが夢なら…しかも僕の

ではなく別の誰かの夢だとしたら…意味が分からない…そもそも人の夢を　他人が見ることなどできない…

てかコレが夢だということ事態　間違っているんじゃないのか？…実際に僕はここにいるという実感がある…それに女に首を絞められた時…痛みも苦しみも感じた…

仮にコレが夢だとしても…サオリは僕達は皆同じ立場だと言っていた…みんなして同じ夢を見てるってことなのだろうか？…

誰かの夢って事は…その誰かが僕らに同じ夢を見せているのか？…でもどうやって？…

不意に僕の頭の中で《催眠》という言葉が浮かんだ…

どこかの催眠術士が僕らに同じ夢を見させているのか？…集団催眠ってヤツ？…なんの為に？…分からない…アホらしいが…それ以外に思いつかなかった。

『1メートル…』

またあの女の子だ…

『おい…誰だソイツ？』

ツバサが言った。

気付けば僕の隣に誰かいる…それを見ると、僕よりも背の高い男のようだった。

その男はおもむろに拳を振り上げたかと思うと…そのまま僕に殴りかかってきた。

『うおッ！！』

とっさに僕はしゃがんで避けた！！

が…

ドォン！！…大きな音がトンネルの中に鳴り響いた。

僕は唖然とした…見上げると男の腕がトンネルの壁に突き刺さっている…どんだけの馬鹿力だ…あり得ないだろ…壁はコンクリートだぞ…

今　もしこの男のパンチを避けてなかったら…僕は確実に死んでいただろう…考えただけでゾッとする…

この男はどうやら僕を殺すつもりのようだ…

第６話　殺意（前書き）

登場人物

沙織　（サオリ）　２８才

東京で働いている普通のＯＬ。なかなか頭の切れる頭脳の持ち主だが、動揺すると何もできなくなる。暗いトンネルの中で　ツバサの後頭部に銃を突き付けたように見せ掛けるトリックを使った。

第6話　殺意

誰なんだよコイツ？…化け物？…力半端なさすぎ…つか何で僕を狙うんだよ？…

…もしかしてサオリ達の仲間？……コイツがマサヤか？

『素早いな…このネズミ野郎』

男は僕を見下ろしながら言った。

すると　男は壁から腕を引き抜き　すかさず　しゃがんでいる僕に殴りかかった。

僕は直ぐ様　立ち上がると同時に上へと跳んだ！！

『ぉおッ！！』

僕は　やはりあの時と同じように　１０メートル近い高さまで跳び上がった。

『と　跳んだッ！？』

サオリの驚く声が聞こえた。

ああ…やっぱ跳べちゃうんだ…と一瞬思ったが、このジャンプ力がなければ　僕は死んでいたかもしれない。

ドォン！！…男の腕が地面に突き刺さり、大きな音がまたトンネル

の中で鳴り響いた。
あまりにもすごい力の為、途中でパンチを止めることができないのだろう…
僕は男の背中の上に着地し、直ぐ様トンネルの反対側の壁ぎわまで逃げるように跳んだ。
向こう側に跳んでいる最中　下の方で
『おお～すげ～』
とツバサの感心している声が聞こえた。
だが　僕は勢い余ってトンネルの壁に体ごと激突した。
『痛てぇッ！！』
めちゃくちゃダサい…やっぱカッコつかねぇ…
それでもツバサは
『おお～すげ～』
と感心していた。
『…ウサギ野郎……いやカエル野郎か』
暗くて顔までは見えないが、男はヘラヘラと笑っているようだった。

戦う？…逃げる？…と頭の中で一瞬考えた…

…が…正直　僕にこの男を倒せるとは到底思えない…

一発でもパンチを喰らえば　そこで僕の人生は終了…間違いなく死ぬだろう…

…死ぬ？……でもサオリが言うにはコレは一応　夢の中なんだよな？…僕のじゃない誰かの…

ここで死ねば　僕は現実に帰れるんだろうか？…

この男のパンチを受ければ帰れる…？……

怖い…めちゃくちゃ怖い…てかコレはただの夢じゃないんだ…痛みもリアルに感じる

無理無理無理無理…やっぱ超怖い…帰りたい…

どうせ死ぬなら　もっと楽な死に方があんだろ？…馬鹿かよ…

…つか　死んだら帰れるなんて考えはやめよう！！なんか色々と間違ってる気がする…もっと別の方法があるでしょ？…

それに実際に痛みは感じるんだから…殴られた痛みのショックで…現実の僕も死ぬんじゃないか？

うん…きっとそうだ！！

…実際に痛みを感じるということは…現実の僕の体とリンクしてい

るということ…つまりこの世界で死んだら　現実の僕も死ぬ…うん…なんかそれっぽいな…合ってんじゃないか？

となれば　僕のやるべき事は　今すぐこの男から逃げることだ。

もちろん逃げるといっても　ツバサを置いていくわけにはいかない。

ツバサと一緒に走って逃げよう…ツバサにその事を伝えなければ

『ツバサ逃げるぞッ！！』

僕はツバサに言った。

『えっ？逃げんの？』

ツバサは今のこの状況を理解できていないようだった。

『とにかくトンネルの出口に向かって走れッ！！』

と　僕が言い終わるか言い終わらないか　という瞬間に

ドコォッ！！

ツバサがまるで人形のように4、5メートルほど吹っ飛んだ…

突然の出来事だった…

男のヘラヘラとした笑い声が聞こえた気がする…

ツバサはうずくまったような状態で倒れた…すぐに起き上がってくるんじゃないかと僕は期待した…

が…ツバサはピクリとも動かなかった…

『ツバサ？』

僕はツバサに呼び掛けてみた。

返事はない…

まさか……

…死んだ…？…嘘だろ…！？

暗闇でよくは見えなかったが…ツバサはあの男に殴られたようだった…

コンクリートが砕けるほどのパンチだ…まともに受ければ助からない…

…僕はツバサを見た…さっきまでしゃべっていたのに…今はもうしゃべらない…ツバサはもう動かない…

僕のせいだ…

僕がもっと早くツバサに逃げろと伝えていれば…ツバサは死なずにすんだかもしれない…

時間を戻せるなら戻したいと本気で思った…ほんの数分戻すだけで…ツバサを助けることができるのに…今の僕には後悔しかなかった。

……

…そうだ…コレは夢なんだよ…ツバサは死んだんじゃない……現実に帰っただけだ……今頃ベッドの上で目を覚ましていることだろう……僕はそう信じたかった…

大丈夫……大丈夫……僕は自分に言い聞かせた。

冷静になれ…今はあの男から逃げなくてはならない…

…たとえツバサが死んだとしても…僕はツバサを置いていくつもりはない…ツバサを背負ってでも一緒に逃げるつもりだ…

僕はあの男を見た…男が歪んで見える……気が付くと僕は泣いていた。

こんな僕でも他人の為に泣くことができるのか…いや…もはやツバサは僕にとって他人ではなかったのかもしれない…

さっき出会ったばかりだが…いつの間にか情がうつっていた…

……気が付けば道路の上にいた…ここがどこなのかすら分かっていない…ツバサは僕と同じだった…

僕の中で仲間意識が強くなっていたんだと思う。

僕は涙を拭って男を見た。
男は自分の腕を擦りながら　ふらふらとツバサの方に近づいて行く。
『う～ん…はずれか…』
男は倒れているツバサを見て言った。
はずれ…？…どういう意味だ…？
『まぁこの力があれば簡単に人も殺せるみたいだ…俺は特別なのかもな…お前らとは違う』
今度は僕とサオリ達を順々に見て男は言った。
サオリは怯えているようだった…体も震えている。後ろにいた女の子は　サオリの背に隠れている…
どういうことだ…仲間じゃないのか？
『跳ぶだけしか能のないお前とは違うんだよ…このカエル野郎』
僕に指を差して男が笑う。
何なんだこの男…自分の力に酔いしれているのか…？
さっきツバサを見て　はずれか　と言ったが…アレは何なんだ？…
それに　この力があれば簡単に人も殺せるみたいだ…とも言ってい

た。

まさか自分の力を試したいが為に　ツバサを殺したんじゃないだろうな？…

僕の中でとてつもない殺意が生まれた。

『次はお前な…』

と　男は僕に指を差しながら言った。

やってやる…僕はもう逃げることなど忘れていた。

この男を殺してやりたいと本気で思った。

僕のやろうとしている事は間違っている…だが許せなかった…それにこの男を野放しにしておくわけにはいかないとも思った…だけど…

僕はツバサを見た…

また目に涙が浮かんだ…

ちくしょう…ちくしょう…ちくしょう…ちくしょう…

僕はまた涙を拭って男を見た。

男は僕に向かって歩み寄って来る。

僕は決めた…

殺しはしない…だけど後悔させてやる…痛みを教えてやる…

僕は男に向かって全速力で駆け出した！！

第7話　絶望からの希望

あの時と同じだ…僕は信じられないスピードで走った！！

『な　何だッ！？カエル野郎？…』

男は驚いてすぐに身動きがとれず　その場に立ち尽くし　ただ僕を見つめることしかできない。

『うるせぇ！！この人殺し野郎ッ！！』

僕は男に怒声を浴びせながら　そのまま男に向かって突っ込んだ！！

ドォーン！！…今までにないくらいの大きな音がトンネルの中で鳴り響いた。

僕はすごい勢いで男を壁に叩き付けたようだ…

見ると　男が壁に少しめり込み　頭から血を流していた…

やり過ぎたか…僕は不安になった…

今　僕は全速力でこの男に体当たりをした…あの時と同じなら　およそ８０キロくらいのスピードで僕は男にぶつかりそのまま壁に叩き付けたことになる…

時速８０キロというと…高速道路で走る車と同じぐらいの速度だ…

つまり　高速道路で走る車に引かれたのと同じぐらいの衝撃があっ

たのかもしれない…

普通死ぬよな…？…高速道路じゃなくても…一般道路で車に引かれても…人は死ぬことがあるのに…

ましてや高速道路なら確実に死ぬんじゃないのか？…

僕はその場で後退った…

むしろ後悔したのは僕の方な気がする…

僕は助けを求めるようにサオリ達を見た…

サオリは　ぷいっと横を向いた。

何だよそれッ！？…私には関係ありませんってか！？…ふざけんなよッ！！…

僕はサオリに軽く失望した…

すると

『痛てェな…クソ野郎…』

男が壁から剥がれ出てきた。

男は生きていた。

僕はホッとした…だが素直には喜べなかった。

コイツはツバサを殺したんだ…許す訳にはいかない。
だが…もういい…これ以上この男をどうこうするつもりはない。
男は僕を睨み付けて
『今殺してやるから　そこでジッとしてろ』
と言った。
『…僕は殺し合うつもりはないし…これ以上傷つけ合うつもりもない…もう帰ってくれ…どこかへ行ってくれ…』
と　僕は言ったが、
『何だよ…勝ち逃げか？…俺はお前をぶん殴らねぇと気がすまねぇ…』
と男は言い、ふらふらと僕に近づいて来る。
『勝ち逃げ？…僕は仲間を殺されたんだぞ…とても勝った気にはなれない…むしろ負けたんだ…』
と僕は男に言ったが…へらへらと笑っているだけで反応はない。
『僕は一度あんたを本気で殺したいと思った…でもあんたを殺したら…僕はまた後悔すると思う…だから僕はこれ以上争うつもりはない…』
と僕は男に再び言った…

が…男は

『お前に俺を殺せると思ってんのかッ！！』

と　怒鳴った…どうやら余計怒らせてしまったらしい…

どうすりゃいいんだよ…僕に謝れっていうのか…？…いや…僕が謝るのはおかしいだろ…？…だったらどうすればいい…？…どうすればこの男を止められるんだ…

そんな事を考えているうちに…男が僕の目の前にやって来た。

男は僕に掴みかかろうとした。

僕はとっさに後ろへと跳び上がった…

…が…空中で右足を掴まれてしまった。

『やべッ！！』

メキキ…足首の骨がしなる音がした。

僕は右足を持たれたまま　体ごと地面に叩き付けられた！！

『ごほォッ！！』

まずい…殺される…

僕は助けを求めようとサオリ達の方に目をやった…が…サオリ達の

姿はない…

ふと　トンネルの奥の方を見ると…サオリと女の子が走って逃げて行く後ろ姿が見えた…

あいつらマジかよ…僕を見殺しか…

まぁ元々仲間というわけじゃなかったし…こうなるのは当然なのかもしれないが…人としてどうなんだ？…あいつらに良心はないのかよ…僕は泣きたくなった…

『この足か…この足がなけりゃ…』

男はそう言うと、拳を高く振り上げた…かと思うと

そのまま僕の右足に殴りかかった。

ボギャァッ！！！！…

僕は自分の足の骨が砕かれる音を聞いた…

あまりの衝撃にほとんど痛みすら感じなかった…足の感覚がない…

僕は自分の足を見る勇気がなかった…

『うわあああああああッ！！！！！！』

僕は叫んだ！！…このままじゃ殺される…

僕は逃げようとしたが…足に力が入らない…それに逃げようにも
男は左手で僕の体を押さえ付け　身動きすらとれなかった…僕の力
ではどうすることもできない…

『誰か…誰か助けてくれッ！！！！』

僕は必死に叫んだ！！…だが　誰も答えてはくれない…

…僕の人生…こんなんで終わりかよ…

『もう片方の足もいっとくか…』

悪魔のささやき声が聞こえた…マジかよ…

こんなクソ野郎に僕は殺されるのか…ツバサもコイツに…

僕は何気なく　ツバサが倒れている方に目をやった…

が…そこにはツバサの姿はなかった…

あれ…？…ツバサは？…

男はまた高く拳を振り上げた…

すると　そのまま僕の左足に向けて　降り下ろす！！

『う　うわあああああッ！！！！！』

僕はもう駄目だと思い　目をつぶった…

ドコォッ！！…

足が砕かれた時とは違う音がした…

僕は恐る恐る目を開けて…自分の足の方を見た…

そこには何か奇妙な物体が　僕の足をかばっているように見えた…

何だこれ…？

よく見ると僕の足元に誰かが中腰でかがんでいる…

僕の足をかばった奇妙な物体は　僕の足元にいる人の背中から生えているみたいだ…

僕はその人をよく見た…

……

僕はその姿に見覚えがあった…

そこには上半身裸の男が立っている…僕はその姿を見た途端　涙がこぼれた

第8話　超能力者

ツバサ…生きていたんだ…僕は涙が止まらなかった…

僕は本当に嬉しかった…声にならないほどに…

だが…ツバサのあの背中のヤツはどうなってんだ…？

前よりも明らかにデカクなっている…いや…どちらかというと…今まで閉じて背中についていたものが…手のひらを開くように広がったという感じだ…

まるで大きな手のようなものが二つついている…見方によってはそれはまるで背中に生えた翼のように見えた。

ツバサの背中に翼が生えている…なんかダジャレみたいだが…本当にそんな感じだった。

『クソガキ…生きてたか』

男は少し動揺しているようだった。

『うん…』

ツバサはいつになく冷静に見えた。

『そうだ…お前に良いこと教えてやるよ…本当に強い奴っていうのはさ…他人を思いやれる奴の事を言うんだよね…お前とは違う…いやマジで…』

ツバサはたんたんとしゃべった。

『…何だそれ？…説教か？…』

男はツバサに言った。

『うん…俺も今そう思った』

ツバサは何気ない顔で答える。

すると　いきなり男はすごいスピードでツバサに殴りかかった。

ドコォッ！！…

が…ツバサの背中のヤツに簡単に受け止められてしまった…

どうやらあの背中のヤツは　自由自在に動かせるらしい。

男の額に汗がタラーッと流れた…

『ほい！』

バキッ！！…ツバサは受け止めた男の腕を背中のヤツで軽々とへし折った。

『い……てェッ！！』

男は右腕を左手で押さえながら後退った…

『これでお会い子だな…地球のみんなと仲良くしろよ』

ツバサは決めゼリフなのか…ワケのわからない事を男に言った。

『……』

男は下を向いたまま何もしゃべらなかった。

『じゃあ…行くか…ここにいてもしょうがねぇし…』

と言うと　ツバサは倒れている僕の腕をひっぱり、僕を起こしてくれたが…

…僕の右足は折れている…いや…折れてるどころの騒ぎじゃないかもしれない…僕は不安だった…とりあえず左足だけで地面に立った。

『そういや足折られたんだよな…もう少し早く助ければよかったわ（笑）』

ツバサは爆笑した。

…殺してやる…僕は心の中で思った。

とりあえず僕はツバサの肩を借りて落ち着いた。

『とにかく病院を探そう…僕の足も折れてるし…お前の背中のヤツも　どう見ても普通じゃない』

と　僕はツバサに言った…が

『そうだな…ここってどう見ても普通じゃないよな…現実じゃありえないような事が起こりすぎてる…そもそもちゃんとした病院なんてあんのかな？』

と　ツバサが言った。

たしかに…てかここが夢の中だということを忘れていた…いや…まだ夢だと決まったわけじゃないが…

どうしよう…？…まぁどちらにしろ　ここでジッとしているわけにはいかない…行動あるのみだ…

『とりあえず…このトンネルの先に出よう…』

僕はそう言い、何気なく後ろを振り返った…

すると　あの男がトボトボと反対側の出口に向かって歩いて行くのが見えた…

僕はその後ろ姿を見て　哀れに思った…

あの男…これからどうするんだろう…？

こんな　おかしな世界で　アイツは1人で大丈夫なのだろうか…？

あの男はずっと1人で行動しているのか…？

仲間はいるんだろうか…？

もし　こんなとこに1人でずっといるんだったら…精神的におかし

くなるのも無理はない…

アイツが暴れたくなる理由も分からなくないような気がするが…僕たちを襲ったのは　もっと別の理由がある気がする…

あの男はツバサを殴り飛ばし…ツバサが死んだと思い…倒れているツバサを見て《はずれ》かと言った…

とても意味ありげな発言だ。

あの男は誰かを殺そうとしている…しかもツバサを殺したと思った瞬間に別人だということに気付いたのか…？

男は殺したい奴の顔を分かっていない…いや…トンネルの中が真っ暗だから顔はよく見えなかったかもしれないが…そこまでアホじゃないだろ…

顔を知らないから顔を確認する必要さえないんだ…無差別に殺し…ソイツがその男のいう　はずれではなく《当たり》なら何かが起こるのだろうか…？

あの男に直接聞けば分かることだが…素直に教えてくれるとは思わない…それに今はそっとしておいてやった方がいいような気もする…

『アイツ…どうする？…』

と　僕は一応ツバサに聞いた。

『どうするって…捕まえるか？…アイツまた誰かを襲うかも分かんねぇしな…』

とツバサは答えた。

『いや…多分大丈夫』

と僕は言ったが…なんの根拠もない…あの男がまた誰かを襲うという可能性は十分にある…

だけど今あの男の右腕は折れている…おそらく利き腕を失っているわけだから…その利き腕が治るまでは　あまり大胆な行動はとらないんじゃないか…？…根拠はないが…ただ僕はそうだと思う…

『う～ん…一応もう片方の腕も折っとくか』

ツバサが恐ろしいことを言った。

……

『悪いが僕は無抵抗な相手にそんな事はできないな…』

と僕は言った。

『冗談に決まってんだろ（笑）』

ツバサが笑った。

冗談なのかマジなのか分かりづらかった…

だが　なんとなくそれがいつものツバサだと思い　僕は安心した。

気が付くと男の姿はなかった。どこかへ行ってしまったようだ…まぁ大丈夫だろう…信じるしかない

……

不意にタッタッタッタとトンネルの先から誰かが走って来る音が聞こえた。

それは見知らぬ男だった…

その男の後ろにはサオリとさっきの女の子がいた。

サオリ達が助けを呼んで来てくれたのだろうか…？

『さっきの男は？』

サオリが僕に聞いた。

『いや…どっか行ったけど…』

僕は正直に答えた。

『お前逃がしたのか？』

サオリと一緒に来た男が僕に聞いた。

『まぁ…そうですね…』

僕はあくまでも正直に答えた。

すると　その男は僕の胸ぐらをグイッと掴んだ。

『マサヤさん…』

サオリはその男を見て言った…どうやらこの男がマサヤらしい…

『やはりコイツらも殺しといた方がいいんじゃないか？…もしかしたら《当たり》かもしれないぞ…』

とマサヤがサオリを見て言った…

が…サオリは首を横に振ってくれた。

つか今《当たり》とか言ったよな？…やはりさっきの僕の考えは合っているのかもしれない…

『当たりって何だ？』

ツバサが率直に聞いた。

『……』

だがマサヤは答えてはくれなかった。

『シカトかよッ！！』

ツバサは　ちょっと怒った。

すると　突然マサヤはさっき男が出ていった方の出口に向かって走って行ってしまった…

『何なんだアイツ…？…頭おかしいんじゃねぇの！？』

ツバサが言った。

アイツ…もしかしてさっきの男を殺しに行ったのか…？…あのマサヤとかいう男ならやりかねない気がする…

『止めに行った方がいいかもしれないぞ…』

と　僕は言った。

『…何で？』

と　ツバサは僕に聞いた。

『アイツもしかして　さっきの男を殺すつもりじゃないか？…』

と　僕が言うと…

『マサヤさんはそんな事しません！！』

と　サオリの隣にいる女の子がキッパリと言った。

『じゃあ　そのマサヤさんは何をしに向こうに行ったんだ？』

と　僕が質問すると…

『……』

女の子は下を向いて黙ってしまった…

やはり　この子もマサヤが何をしに行ったかまでは　分からないようだ…いや…それとも何か隠しているのか…？……それは考えすぎか…

『まぁ分からないなら　尚更様子を見に行った方がいいだろう』

僕はみんなに言った。

『なら俺が見に行ってくる！』

ツバサがソッコーで答えてくれた。

が…もしものことを考えると…僕はツバサを1人で行かせたくはない…だが足の折れた僕が一緒に行ったところで…足手まといになるだけだろう…と思い…

『サオリさんも一緒に見に行ってくれませんか？』

と　僕はサオリさんに言った。

『私…？』

と　サオリさんは少し困惑気味だった…

が…サオリさんに一緒に行くよう　頼んだのには　ちゃんと理由がある。

もしあのマサヤとかいう男が　ツバサを殺そうとした場合…マサヤ

を止められるのは　知り合いのサオリさんだけだと僕は思ったからだ…

サオリさんの隣にいる女の子に行ってもらってもよかったのだが…ここは年上のサオリさんに行ってもらった方がいいだろう…

『すみませんけど…お願いします』

と　僕は言った。

『はぁ…分かりました』

と　サオリさんは返事をしてくれたが…

『サオリさん…行く必要ないよ…誰かがこっちに向かって来てる…多分マサヤさんだ』

と　女の子が言ったので…

僕はトンネルの出口の方を見たが…誰もいない…

『何でそんな事が分かるんだ?』

僕は不思議に思った。

『この子…耳がとても良いんです…遠くの足音も聞き取る事ができるみたいで…』

と　サオリさんがすかさず言い…

『でも別に変じゃないんですよ…この夢の中にいる人は皆　何か不思議な力を持っている事が多いみたいなんです…前に　モノを浮かしたり…投げ飛ばしたり…念力みたいなのを使う　すごい人もいたらしいですよ…』

と　説明してくれた。

耳がとても良い…？…超感覚的知覚とかいうヤツ…？

それに念力みたいなのを使う人もいた…？…サイコキネシスか…前に本で読んだことがある…たしか《超能力》の一種だったよな…

僕の足や…さっき僕たちを襲った男の腕…それにツバサの背中…ここにいる人達は皆　何かしら不思議な力を持っているのか…

ということはやはりマサヤも…アイツは何か特別な感じがする…僕たちを殺した方がいいと言った時も…とても自信に満ちあふれていた…絶対に負けないという確信がある…そういう事だろう…

一体どんな能力を持っているのか気にはなったが…知らない方がいい事もある…それを知ろうとすると…僕はマサヤに敵意をみなしたとされ…殺される気がする…冗談ぬきであの男ならやりかねないと思った…

それに僕の目の前にいるサオリさんにも　多分何かしらの能力があるのだろう…本人はまだ気付いていないという可能性もあるが…

となると　この世界にいる人達は皆　超能力者ということになるな…

僕の能力の場合…超能力というよりは　潜在能力と言った方が近い

感じもするが…

……

僕は思った…最初に僕を追いかけてきたあの白い服を着た女…あの女は僕と同じ能力を持っていたということか…

背中に大きな火傷を負って死んだようだが…もしかして火を出せる能力を持っている人がいるのだろうか…？

パイロキネシス…発火能力…たしか本でそんな超能力も書いてあったような気がする…

だとしたら　その発火能力を持った人間があの女を殺したのか…？…

でもなぜ？…

……

普通に考えるなら…さっきマサヤが言っていた…《当たり》というのが関係しているんじゃないだろうか…？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9099z/

風吾の潜在能力

2012年1月11日07時51分発行